

「夢の通ひ路物語」についての一考察

河 端 惠
鈴 木 敏 子

序

いわゆる擬古物語「夢の通ひ路物語」は、平安後期から、鎌倉、室町時代初期にかけて、数多く作られた作品の中で、奇しくも散逸を免れたのみならず、現存する擬古物語の中で、最も大部のものである。しかるに、その伝本は、目下のところ名古屋市蓬左文庫に、一本のみが所蔵されているという、文字通り天下の孤本である。

昭和四年、山岸徳平氏によって発見された後、割合に研究不十分なまま、今日に至ってきた。昭和四十七年に影印本（古典研究会叢書）が刊行され、最近になって金城学院大学の工藤進思郎氏を中心に研究が進められ、その成果が「夢の通ひ路物語」（昭和五〇年、福武書店）の刊行となり、また同氏らの諸論文が発表されたことに

よって、俄かに注目を浴びるに至った観がある。

一

ここに本物語の構成、及び冒頭文の作られ方の特徴について考えてみたい。

一般に平安後期～鎌倉時代の物語の冒頭文を分類するとき、すでに三谷栄一氏も「物語文学史論」で説かれるように、次のような傾向を見出すことができる。

第一の型として、時・所・人の説明から導入される場合。たとえば、

。いまは昔、竹取の翁といふもの有けり。

「竹取物語」

。むかし式部大輔、左大弁かけて清原の王ありけり。

「宇津保物語」

。今は昔、中納言なる人の、御女あまたち給へるおはしき。

「落窪物語」

。いつれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いと、やむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

「源氏物語」

(以上、引用文の表記は、岩波古典大系本に依る)
次に、第二の型として、いわゆる情景描写が先行して、その後、時・所・人の説明に入る場合。たとえば、

。少年の春は、惜しめども留まらぬものなりければ、弥生の廿日余にもなりぬ。
「狭衣物語」(岩波古典大系本に依る)

。つれなくみえしわかれより、うき物に思ひはてにしありあけのそらばかり……
「在明の別」(天理善本叢書に依る)

。あふてのこひもあはぬなけきも人の世にはさまくおほかなる中に……
「昔の衣」(尊経閣叢刊複製に依る)

などが考えられよう。

以上の型に対して、ここに本物語の冒頭文の場合を考えてみよう。

巻一の冒頭(2オ〜11ウ)に「序」と思われる部分がある。そこには、吉野の古き御陵に仕える聖について書かれ、彼が夢の中で近

頃亡くなったこの物語の主人公である一条大納言から巻物を託されることを述べたところから始まり、巻一、10オから巻六、78ウまでに挿まれた長い物語は、すべてこの巻物に書いてあったものとされる。つまり本物語の大部分は、その「序」において、夢の中で託された巻物を、この聖が読み進めていく——という形式で構成されている。

この手法は、確かに立体的な効果をあげており、聖はそれを読み終えたあと、三の御子にその巻物を渡し、出生の秘密を告げてその役目を果たす。まこと長編ながら曖昧に終わることなく、完全に首尾照応している点は賞讃され、注視されるべきであり、当時の読者を満足させたであろうことも想像できよう。これは、作者が、「源氏物語」の世界にひたる一方、何か従来のワクを乗り越えて、一歩進みたい、とする気持ちから出たとも考えられよう。

このような物語構成は、他にあまり例をみない。「夜の寝覚」における形式——全巻の主題をその冒頭に据える——の外に、たとえば「無名草子」の場合、八十三歳の老尼が、最勝光院近くの松皮茸の邸に立ち寄って、その女性たちに会った折の話から、物語評論が始まったり、また「大鏡」のように、雲林院の菩提講に参会していた百九十歳の大宅世継と百八十歳の夏山繁樹、その後妻である老婆の三人が、説経の始まるのを退屈そうに待っていた青侍をはじめ

として、多くの参会者を相手に、道長中心の政治の経過を主にした回想を始める。おもに世継が語り、繁樹が補ない、青侍が相づちをうって物語が進行していく——という構想など、確かに前述の二、二の型とは異なっている。

ただ「無名草子」「大鏡」は、いわゆる物語ではなく、「改作本寝覚(中村本)」「風につれなき」などに、それと類した形式を見出し得るが、「夢の通ひ路」のような構成は絶えて見られない。かかる点、やはり新規な冒頭の作られ方として、改めて作者の構成力を評価しておきたい。

二

本物語の題号「夢の通ひ路」は、平安末期〜鎌倉初期の擬古物語の例にもれず、うつくしい響きをもつ反面、少し力のない響きをも合わせもっている。これは、この期の物語文学の特徴の一つともいわれているが、この題号の出所、ひいては風葉和歌集にとりあげられ、「夢のかよひち」と記された歌二首との関連性など、改めてここに検討を加えてみたい。

さて、風葉集に載せられた歌二首を、中野莊次・藤井隆氏「増訂校本風葉和歌集」によって示せば次の通りである。

たいしらす

A いつもかく秋は露けき袖なれと

月みる程そしほり侘ぬる

(秋上・二七三)

夢のかよひちの中君

しのひたる女のもとより我にもあら
ていつとよめる

よみひとしらす夢のかよひち

B いかにして今より後も尋ねみん

人にしられぬ夢のかよひち

(恋二・八七五)

この二首は、現存本「夢の通ひ路」に見当らない。歌自体は、恋をよんだ歌であるから、現存本と全く無縁のもの、一概に見捨てたいたのではあるが、すでに工藤氏も説かれるように、歌(A)を詠んだという「中君」に該当する人物が、現存本には見出せないこと、本物語においては、男女に関係なく、「一の君」「二の君」「三の君」といった呼称を、まったく用いていない点からも、この中君の歌は現存の物語とは関係がないであろうとされた。(もっとも、巻三冒頭部分の脱文箇所を想定して、或いはその部分に歌われていたか、との疑念もなお残しておられるように思われる——同氏「夢の通ひ路物語」に拠る。)

ここに、工藤氏の御説を踏まえながら、改めて、「和歌と題号及び主題との関係」に視座を置き、石川徹氏の御見解をも含めて考えてみよう。

石川氏は、「古代小説史稿」の中で、当時の物語の題号のつけ方について、三つのケースを考えられた。第一は、単に命名に当たっての修辭的技巧として、歌の句らしくなった場合、第二は、作者の作った、その物語中の歌の一句に基づく場合、第三は、有名な古歌の一句を借用した場合である。当面、第二の場合を取り上げることになるが、確かに、当時の作品は、その物語中に題号を含んだ主題歌を載せている場合が非常に多い。換言すれば、その作品の題号は、その主題歌の中から生まれてくる訳である。その例をいくらか挙げてみよう。

3	住吉物語	七	住よしのおまとなりてはすきしかと かはかり袖をぬらしやはせし	巻十八 三三
				雜四二
2	松浦宮物語	一八	けふよりや月日のいるをしたふへき まつらのみやにわかこまつとて	巻八 三三
				離別
1	浜松中納言物語	二九	日の木のみつのはまゝつ今夜こそ 夢にみえつれ我を恋らし	巻八 九九
				旅
作品名			題号をふまえた歌	風葉集 所収
中の歌の数				

8	7	6	5	4
苔の衣	わが身に たどる姫君	いはでしのお	狭衣物語	石清水物語
二	七	三四	五六	五
色々にそめしたもとをいまはとて こけの衣にたちそかへつる	いかにしてありしゆくゑのさそとたに 我身にたどるちきりなりけん	おもふこといはてしのふのおくならば そてになみたのかゝらすもかな	いろ／＼に重ねては着し人知れず 思ひそめてし夜半の狭衣	ふかくのみたのみをかくる石しみつ なかれあふせのしるへともかな
				巻七 神祇 四六

なお、右のうち1〜4は、その主題歌が風葉集にとられているが、当然ながら、1〜8それぞれの歌は、すべてその題号に当る語句を歌の中に含んでいる。また、風葉集にその歌を載せられた散逸物語、「いはかきぬま物語」「河霧物語」「しくれ物語」「霧分わふる物語」「なてしこ物語」「みかきはら物語」「やまふき物語」「吉野山物語」「よその思ひ物語」なども、題号と同じ語句をそれぞれの歌の中に含んでいる。やはりこれらの歌もまた、題号の出所となった主題歌と考えて間違いないのではなからうか。

ならば、風葉集にとられた歌二首のうち、(B)の

いかにして今より後も尋ねまん

人にしられぬ夢のかよひち

は、風葉集にいう「夢のかよひち」の主題歌と覚しい。何とならば、歌例の中に、「夢のかよひち」なる語句を含み、それが題号にとられたと思われるからである。

一方、現存本（蓬左文庫蔵）「夢の通ひ路」にも、実に主題歌と覚しいものが存在する。

哀しれまよふつゝのうきことに

いかでさまざま夢のかよひ路

（巻六・79才）

これは、主人公一条権大納言が詠んだもので、しかもこの長箱物語が、ようやく終りに近づいたあたり、作品全体に重要な役割をもつ聖が、巻物を読み終えた時にふと落ちかけた小さな紙に気づいて見ると、この歌が書かれてあったという効果的な設定、また内容においても物語全体の総括的な歌である。この主題歌たるにふさわしく、そして題号をも含むこの歌の存在は、改めて注意する必要がある。二書同一説の場合、一つの作品の中に、その主題歌が二首もあり、それぞれ題号となる語句を含むことになるが、それはいかなるものであろう。その作品の印象が、かえって散漫となり、主題の分裂をきたしたり、その他の諸条件と考えるとき、む

しろ、一個の作品に一つの主題歌があり、その歌の中の語句が題号にとられた、とするケースの方が、より素直な見方のように思われる。

以上のように考えてきた場合、歌例「いかにして今より後も尋ねまん人にしられぬ夢のかよひち」を含む風葉集所収の「夢のかよひち」と、主題歌「哀しれまよふつゝのうきことにいかでさまざま夢のかよひ路」を始め、歌九十九首を含む現存本「夢の通ひ路」とは、現在のところ、むしろ別個の物語と考える方が妥当ではなからうか。

三

本物語の成立は、一般に南北朝から室町と目されるが、語彙・語法面からも、王朝物語とは違つて、時代的にもいささか特異な表記が見られる。いまその中から、一つの例をとりあげてみよう。

実は、形容詞のシク活用の語尾が、「しゆふ」と表記されている例が、巻一にのみ集中的にみられることである。形容詞の連用形は、普通ならば「あさまし」の場合、「あさましう」あるいは「あさましく」となるはずのところ、「あさましゆふ」と表記されていることである。発音面からは、音便変化による「しふ」「しう」表

記とあまり違はないようだが、ただ、かかる表記がなせなされたか。たとえば「しう」が「しゅう」と発音されていても、当時において、「ゅ」というような拗音の表記の方法がなく、「しゅふ」という表記となったのであろうか。

ともあれ、発音面からは、さして不自然なことではないものの、かかる表記が王朝物語の系列作品には、皆無に等しく、かつ蓬左文庫本において、巻一にのみ集中的に現われることは注目されよう。

そこで、巻一において「しゅふ」の形をとっている形容詞のみ、すべて抜き出して、(但し、一部、巻二から「しゅふ」をとる語がある。その場合、巻一の各段は空欄となる。)そのなかで、「しう」「しく」の分布を示し、かつ巻二以降との比較一覧を掲載する。

なお、巻一における「しゅふ」型の語が、巻二以降、「しゅふ」「しく」「しう」の各段とも姿を見せぬ場合は、当然ながら、その各段は空欄となる。

巻一

	ゆ	ふ	う	く
あさまし	3オ・4ウ・47ウ			63ウ・65ウ・68ウ
あたらし	46オ・48ウ			
あやし	3628オ・4430オ・32オ・33オ・56ウ			

いかめし	17オ・19ウ・20ウ										
いたはし	7オ										
いつくし	37オ										
いとほし	38ウ・45オ										
いぶかし	5315オ・17オ・20オ・28オ										
いまめか	16ウ・58ウ										
いみじ	40オ										
うつくし	583617ウウウ 594219オウウ 5221ウウ 5522オウ										
うらめし	45オ・49オ										
うるはし	4510オ・5716ウウ 17ウ・31オ										
うれし	47オ										
おなじ	50ウ・52ウ										
かなし	39オ・42ウ										
きらきら	19オ・29オ										
くるし	5123オウウ 26オ・29オ・29ウ										
さうざう	12ウ・18ウ										
すさまじ	51オ・53オ										
つつまし	3ウ・14ウ										
なつかし	43ウ										

	10ウ	11ウ	53352ウウ 54394ウウ 574023ウウ 5230オオ	46ウ	35オ	66ウ	12オ・32ウ
--	-----	-----	--	-----	-----	-----	---------

卷二

あさまし	13ウ・26ウ・28ウ
あたらし	16ウ・45ウ
あやし	3812ウ・3922オ・4324ウ・4737オ
いかめし	2ウ・17オ・29ウ
いたはし	4ウ・22ウ
いづくし	

なやまし	27オ・40オ
にぎはは	13ウ
はかばか	29オ・52オ
はづかし	14ウ・17ウ・35オ
まほし	32ウ・37ウ・42ウ・46オ
むねむね	44ウ
めづらし	6ウ・14ウ
もどきが	
はし	
ゆゆし	20ウ
わかわか	46ウ
をかし	4421オ・4826オ・31オ・35ウ

いとほし	9ウ・45オ
いぶかし	
いまめか	12オ
いみじ	2ウ・31ウ
うつくし	48228ウ・483415ウ・503519オ・4622ウ
うらめし	
うるはし	15ウ・24ウ
うれし	35ウ・48ウ
おなじ	259オウ・3612ウ
かなし	
きらきら	4022オウ・4623オウ・5127オウ・30オ
きるし	4914オウ・24オ・26オ・41オ
さうきう	
すさまじ	
つつまし	
なつかし	162ウオ・294オオ・11オ・12ウ
なやまし	
にぎはは	
しはかばか	16オ

巻三

あさまし	22オ
あたらし	8オ・18ウ・18ウ
あやし	
いかめし	18オ
いたはし	
いづくし	
いとほし	9オ・21オ
いぶかし	
しいまめか	
	7オ

はづかし	23オ・26ウ・38オ・41ウ
まほし	
むねむね	
しめづらし	19オ・46ウ・47ウ・51オ
めどきが	3オ
はし	
ゆゆし	
わかわか	
をかし	8オ・10ウ・12オ
	7オ
	7オ・25ウ
	10ウ・49ウ
	40ウ

いみじ	17オ
うつくし	6オ・7オ
うらめし	6ウ
うるはし	2ウ
うれし	
おなじ	14ウ
かなし	223オ・233ウ・2413ウ・18ウ
きらきら	
くるし	206ウ・7オ・13ウ・17オ
しさうさう	
すさまじ	15ウ・17ウ・25オ
つつまし	
なつかし	
なやまし	3オ・10ウ・16ウ
にぎはは	
しはかばか	14オ・20オ
はづかし	18ウ
まほし	
しむねむね	23ウ・26ウ
	7ウ・13ウ

うつくし																				
503019 4	32	47 4	724225						34	67 9										
オウウウ	ウ	オウ	ウオオ						オ	ウオ										
53372210		66 5	5025						42	24										
ウウオオ		ウオ	オウ						ウ	ウ										
61392310		16	6030						42	57										
ウオオオ		オ	ウオ						ウ	オ										
64433019		29	6541						62	65										
オオオオ		ウ	オウ						ウ	オ										
		18	25																	
		ウ	ウ																	
		36																		
		ウ																		
		59																		
		ウ																		

巻四

をかし																									

めづらし																										
36	28 2	6115	26		54 5	4815		19	624122 5	45	58422920 8	5	61 4	6513	25											
ウ	オウ	ウオ	オ		オ	ウウ		ウ	オウウウ	オ	ウオウオオ	オ	ウオ	オオ	ウ											
49	4	7029			6735	6116			422317		6544362410	62	6953	6827	34											
オ	オ	オオ			ウオ	オオ			ウオウ		オウオオオ	ウ	オオ	オオ	オ											
53	13	7134			6935	16			512318		45372512		7253	7138	36											
オ	ウ	ウオ			オウ	ウ			ウオオ		ウウウウ		オウ	ウウ	ウ											
72	18	57			49	28			552822		47382817		61	39	38											
オ	オ	オ			ウ	ウ			ウオオ		ウオウオ		オ	オ	オ											
	24												39													
	オ												ウ													

巻五

うらめし	うつくし	いみじ	しまめか	いぶかし	いとほし	いづくし	いたはし	いかめし	あやし	あたらし	あさまし
6131 ウオ	61573415 ウオオウ	19 ウ	638 ウオ	13 ウ	64 オ	634310 ウオオ	26 ウ	14 オ	64 オ	634310 ウオオ	26 ウ
6834 ウオ	68573622 ウクウオ	51 オ	6515 ウオ	15 ウ	71 オ	4624 ウオ	29 オ	16 ウ	4928 オオ	42 ウ	
56 オ	69574622 ウクウク		15 ウ		5436 オオ						
60 ウ	595032 ウウウ		52 ウ								

をかし	しわかわか	ゆゆし	はしどきが
6941 ウオ	69 ウ	3 ウ	
51 オ	72 オ	34 オ	
64 オ			
68 ウ			

はしどきが	めづらし	しむねむね	まほし	はづかし	しはかばか	しぎはは	なやまし	なつかし	つつまし	すさまじ	しきうぎう	くろし	しきらきら	かなし	おなじ	うれし	うるはし
506 ウオ	3111 オオ	47 オ	50 オ	6 ウ	36153 オオオ	56 オ	71 オ	8 オ	63437 ウクウオ	63541995 オクオウウ	56 ウ	35 オ	3911 ウウ				
5115 オウ	3415 オウ		59 オ		218 ウオ		19 ウ		66567 ウオウウ	665521176 ウクウオオ		64 ウ	4511 オウ				
6525 オウ	5621 オウ		66 ウ		2811 ウク		61 ウ		6110 オオ	5828178 ウクオオ			4831 オウ				
6933 ウウ	7122 ウオ				3312 オオ				6318 オオ	6051178 オウウウ			33 ウ				
					54 オ				2 オ								
					61 オ				32 ウ								

巻六

うらめし	うつくし	いみじ	しまめか	いぶかし	いとほし	いづくし	いたはし	いかめし	あやし	あたらし	あさまし
203 オオウ	1018256142 ウウウウ	20 オ	368 ウオ	55199 ウオオ	66 ウ	711 オ	10242 オウ	6215 オオ			
327 オオウ	1029368344 ウオオウ	36 ウ	751 オウ	78239 ウオオ		17 ウ	45 ウ	8623 オウ			
359 ウウ	9377445 ウウウウ	5 ウ	7816 オウ	833911 ウウオ		32 オ	60 ウ	24 オ			
9116 オオ	9480495 ウウウウ	5 ウ	35 オ	935013 ウオ		54 オ	83 オ	45 ウ			
31 オ	93 ウ		80 ウ	59 ウ			65 オ	38 オ			
				94 ウ			93 オ				
				97 オ							

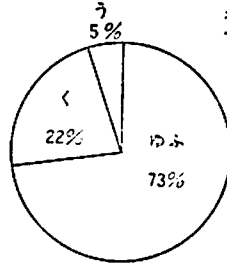
をかし	わかわか	ゆゆし
48422824113 オオオウウ	113 オ	10 オ
50442925163 オウウオウ	3 オ	64 オ
54463026196 オウオオオ	6 オ	
594736262311 オオオウオ	11 オ	

しむねむね	まほし	はづかし	しかばか	しぎわわ	なやまし	なつかし	つつまし	すさまじ	さうぎつ	くるし	きらきら	かなし	おなじ	うれし	うるはし
6 オ	6750358 ウウウ	11 オ	103 オ	8014 ウ	6 ウ	48 オ	8549235 ウオウウ	917441312491 オオウウウ	10 ウ	7618 ウ	515 ウ				
22 オ	69593917 オオオウ		384 ウ	10119 ウ	7 オ		9262335 オオウウ	9484463425153 ウウオウウ	87 オ	10245 ウ	9335 オ				
64 ウ	82604127 ウウウ		757 ウ	33 オ			9771438 ウオオ	9885503827176 ウウウオウ	69 ウ	69 ウ	42 ウ				
	101654534 ウウウ		8 ウ	74 ウ			794918 ウオ	10290673929238 ウオウウ	81 ウ	81 ウ	40 オ				
20 オ	62 ウ				58 ウ	7029 ウ	45 ウ	8 ウ			50 オ				
51 オ					62 オ		80 ウ	31 ウ			100 ウ				
							52 ウ	61 オ							
							57 ウ	93 オ							

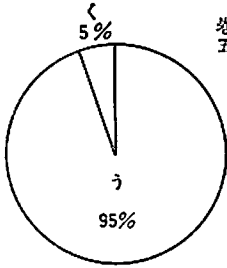
めづらし
もどきが
はし
ゆゆし
わかわか
し
をか
し

64255	6641	716521
ウオウ	ウオ	ウウウ
672814	42	926655
オウウ	ウ	ウウオ
694817	43	6956
ウオオ	オ	オウ
755219	51	6957
オオウ	オ	ウオ

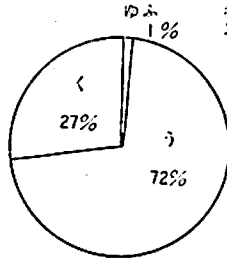
巻一



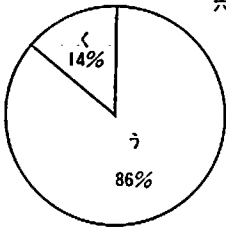
巻五



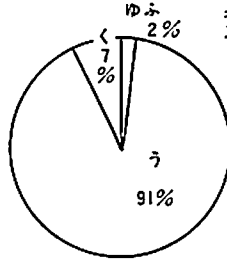
巻二



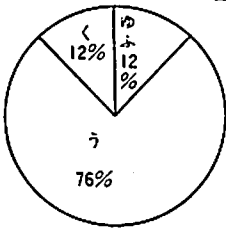
巻六



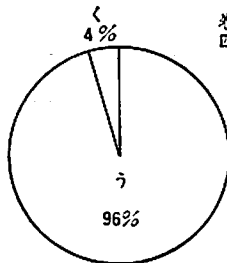
巻三



総合



巻四



以上を改めてグラフにしてみよう。すなわち、巻一で「しゆふ」の型をとった形容詞三十三を対象に、それぞれ全巻「じう」「しへ」の場合との比較分布を以下に示す。

ここに総合的な計数処理を加えたところ、「しゆふ」表現は、巻一において実に73%を占め、「く」の形をとっている例が22%、「う」の形をとっている例が5%である。それに対して、全六巻を通して

みると、表のように「しゆふ」は12%となり、代りに「く」が12%、「う」が76%となる。工藤氏はこれらの用例について

オリジナルなものかどうかを確定することは、とうてい困難であり、また本物語の内容が、お伽草子や仮名草子の類いとは際立った懸隔を示しているところから、やはり室町時代初期頃までには成立していたとするのが妥当であろうと思われる。

と述べられる(同氏「夢の通ひ路」(物語より))が、果して、何が理由で、巻一にのみ「しゆふ」表記が見られるのか、また同時代頃と思われる他の作品、たとえば謡曲などの類にも、かかる表記を見出せないことは、今後の課題として、改めて考察されなければならないであろう。

結 語

以上、物語「夢の通ひ路」について、その冒頭文のあり方、題号からくる二書同一か否かについての考察、そして特異な語彙、語法など、いささか考える所を述べてみた。

ただ、未開拓の分野ともいえる本物語について、なお究明さるべき問題点はあまりに多く、また、本稿に記した考察も、なお改めるべき箇所を生ずるやも知れず、今後その機会を待って、なお考究を加えたいと思う。

(昭五一・二・四)

付 記

本稿を成すに当って、諸家の研究を参照したが、特に工藤進思郎氏をはじめ、伊奈、高見沢、川嶋各氏の刊行された「夢の通ひ路物語」(福武書店)に負う所が多い。

また、四十九年秋に、本学で開かれた学会の席上で工藤氏の御表を拝聴し、かつ親しく激励の御言葉を頂戴した。ここに改めて厚く御礼申し上げる。
(河端・鈴木)

追 記

本稿は、昭和五十年年度本学文学部国文学科の卒業論文として提出された「夢の通ひ路についての研究」(河端・鈴木の研究)から、「題号、特異な語彙・語法について」の一項目を抜萃して、本人たちが加筆・修正を補したものである。卒業論文を書くに際して、本人たちは二年生の頃から、蓬左文庫本(孤木)コピーの翻刻を始め、その間、「金城函文」第十八巻三三号、第十九巻一号、同二号に掲載された巻一の本文翻刻、梗概、系図を始め、古典研究会叢書の影印本に付載の、山岸、平沢両氏の解説、さらに工藤氏ら四氏の労作「夢の通ひ路物語」などに多大の学恩を忝うして、結局、本

文の整備(いわゆる鑑賞本文)、年立、系図等の副論文、その上に立って本稿その他の主論文、併せて六〇〇枚余りの研究を裏らせた。

かかる折に寄せられた工藤進思郎氏をはじめ伊奈・高見沢・川鶴の皆さんの御好意に、改めて厚く御礼申し上げます。特に昭和四九年秋、本学で開かれた全国大学国語国文学会の席上、本人たちにお逢い戴き、何かと御話を賜った工藤氏の御厚情を思い出す。

現今の卒業論文として、確かにその質的内容や表現にいろいろ不備の点をまぬがれない。が、工藤氏らの御著書によって、漸く本物語研究も緒についたというべく、いわば未開拓の分野に、勇敢に取り組み、一応の成果をここに発表し得たことを、本人のために喜びとしたい。

ここに指導教官の責任として、その経過を略記し、加えて先学の方々のあたたかい御指導、御叱正を冀うものである。(大槻)